

目 次

館長任期を終えて	宇野 尚雄	……1	平成7-11年度 附属図書館統計	……4
館蔵資料紹介No. 22			図書館利用者の1人として	林 香月 ……6
好奇心をくすぐる大きな本と小さな本			私の目から見た図書館	郭 艶 ……6
(工学を勉強する学生のために)			職員の異動	……7
	永田 拓	……2	お知らせ	……7

館長任期を終えて

宇野尚雄

附属図書館とは？ 館長の任務とは？ こんな疑問から出発して、長いような、短い3年間であった。「長」と名の付く職務は御免被りたいと横着な意識で過ごしてきた罰であったかと、3年前に急遽一夜漬けの勉強で、館報23号の巻頭で「心の糧と情報の探索」と題する文章で館報紙面を汚した所信を述べる羽目に陥った。以来、苦しんだことも多かったが、嬉しいことのみが想起される。意外に思われるかも知れないが、附属図書館運営の最大の難問は、医学部分館の統合ではなく、電子図書館化という時代への対処方法を見出すことであった。しかし、これは今も模索・右往左往する始末で、日和見主義でやるしかない状況である。詳細は、来春発行予定の岐阜大学自己評価報告書の図書館部分に譲る。

「電子図書館時代では、電子手段が利用できるために、居ながら図書館、24時間開館、メディアセンター、等々の標語が生まれた。図書館資料の実態が変化する訳ではな

く、従来通り魅力ある図書が図書館には必要であって、電子手段が発生したために便利さが向上したに過ぎない。ところが、この便利さは魔物であることに気付く人は多くない。何故なら、便利さをもたらす電子手段は金食い虫で、著作権まで侵害する懸念があるので、既往の権利を蝕む恐れを有しているだけでなく、逆に人間を怠慢にさせる危険性を含んでいるからである。電子手段のお陰で図書館スペースは必要なく、蔵書も必要ないとの意見が最もらしく飛び交う。従って、図書館がなすべき任務は明瞭で、岐阜大学も研究者や学生のニーズに合う図書館資料をどんな手段でも良いから、時代に遅れないように学術情報の入手・提供サービス業務の推進を図ること、そのために出来る限り便利な電子手段（電子図書館化）への道を模索すること、の2面が要請される。しかし具体化手段は明確でない。」という意味深な表現ができようか？

以下には、任期期間の主な行事・改革面について箇条書きして、任務終了の挨拶に換えたい。

- ①「数字でみた附属図書館」（白書）の発行・ホームページ化（H11年4月）
- ② 図書館ホームページ改善（情報サービス課長，専門員の尽力による）
- ③ 特筆される「遡及入力アンケート調査」（H10年秋，目録情報係長による国立大学附属図書館等への調査データは他では得られなかったほどの情報で，全国的に注目された．白書に一部記載済み）
- ④ 50周年記念事業（記念誌編集，写真展記録集）に付随した「学術研究」展示及び継続的な「展示会」
- ⑤「学術交流の場」設置と平成12年夏から「学術交流シンポジウム」の開催へ
- ⑥ 医学部分館の中央館への統合と増改築計画の推進（H11.3までの分館存続方針から，H11.6中央館への統合方針への変更．増改築アドバイザー会議を設置し，増改築案の作成（H11年夏）からH12.4の図書館委員会で正式承認，大学本部（特に施設部）との協議推進による「増改築推進」（医学部移転事業の一環として推進，将来の図書館機能の明確化（最終的に第2回学術交流シンポジウム及び第120回図書館委員会で確認：「学習」「研究」「電子図書館」「学術交流」「地域開放」の5つの機能））
- ⑦ 電子的資料の登録制導入（CA on CD, Medline, 雑誌記事索引，（医学中央雑誌））
- ⑧ 書架容量の改善（学長裁量経費）：学術雑誌「別置」（書架不足解消のための書架増設（H12.春））
- ⑨（資料選定改善）蔵書魅力化策：教官からの図書寄贈または推薦図書名の提供依頼（H12年実施）

- ⑩ シンポジウム「附属図書館はいかにあるべきか」実施（H12.9.29）：第2回学術交流シンポジウム
- ⑪ 医療短期大学部の移転に伴う中央館への蔵書受入（H11年夏から秋にかけて）
- ⑫「電子ジャーナル」利用の便を図ったホームページ上での案内（2.とも連動）
- ⑬ 図書館機能を明確化するための館長メモ（岐阜大学の教育・研究の改革を含めて）を学部長会（H12.5）に提案，学長補佐室で継続検討へ
- ⑭ 館内ツアー（H10.4～），図書館ガイドダンス申込制（H12.8委員会，情報リテラシー推進のため）
- ⑮ 電子図書館化推進委員会（H12.10, 館報編集委員会を拡大改組）の発足
- ⑯「図書館・機能強化のための経費」を大学本部・企画委員会へ要望書（H12.10.30）提出

これらの他に，館壁面緑化，太陽光発電による光熱費節減努力の検討が試みられたが，将来的課題。

最後に，図書館職員に対する教職員の対応について一言：殆どが司書資格を持ち，学内で異色な立場にいるが，今後「学術情報学」とも呼ぶべき業務推進に，職員自身が研鑽しなければならない時代背景にあるために，それを支援して教官がその貢献を受ける状況にあることを理解して，共に支え合いながら図書館運営・機能強化に当たる必要があることを強調しておきたい。

（うの たかお：工学部教授）

館蔵資料紹介No.22

好奇心をくすぐる大きな本と小さな本の紹介
(工学を勉強する学生のために)

永田 拓

昨今、大学への世間の風当たりは厳しく、大学生の学力不足がマスコミ等でもしばしば話題にされるようになりました。ことさらに今日学力不足が叫ばれるのは、産業構造の大変革期にあって、真の学力を社会が以前に増して求めている証左かもしれません。学生は今も昔も、適当に勤勉・有能で、適当に怠惰で未熟な人達だと思います。とは言っても、当節の学力不足の論調に同調して気がかりなことは、学生の好奇心の低下傾向です。学生からの知的好奇心の発露である疑問質問が、確かに少なくなっているように思うからです（もちろん学生だけに原因があるとは考えません）。

これから紹介する本は、卒論修論ゼミや講義（流体力学関連）の際に、私の好奇心をくすぐり、学生の疑問質問（好奇心）に答えるために役立った本です。

1. J.C. Maxwell, 「Matter and Motion」 (420. 2)

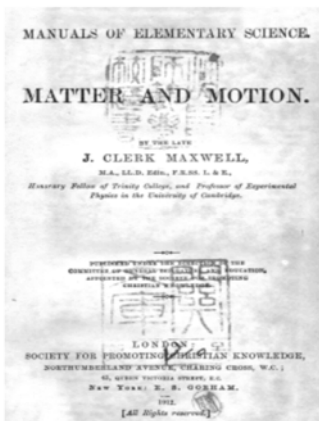


図 1

マクスウェルの本の表紙



図 2

マクスウェルの本の一部

この本（図 1）は、新書版120頁足らずの小さな本です。電磁場の基礎方程式で有名なあのマクスウェルが1877年に書いたニュートン力学の本です。この小さな本は、全70巻（1巻300～400頁）からなるHandbuch der Physik

(420. 3) という大きな本の棚の下段に配架されています。この大きな本は、物理学の全分野を網羅し、まさにドイツの出版界と西欧の物理

学の圧倒的な力を誇る堂々たる叢書です。この中の3冊が私の専攻分野の流体力学に関するものです。那加キャンパスの図書館で初めてこの本を見て、この叢書のボリュームとレベルに圧倒されました。

さて、マクスウェルの本に話を戻します。この本を見つけたきっかけは、Boundary Layer Theory (423. 84) のゼミでの質問です。動粘性係数(kinematic viscosity)をめぐって、粘性係数を密度で割るとなぜ“動”という訳語がつくかとの質問に対して、私は「運動学」の“動”が残ったと答えましたが、学生も私もこの答えに満足できませんでした。図 2 は、Kinematicsの見出しが見られるこの本の1頁です。この頁のように、それぞれの節は短く記述は簡明です。力学現象を理解する上で、KinematicsとKineticsの区分がきわめて重要であることをこの小さな本は教えてくれました。

このマクスウェルの本から一つ隔てた書架に、寺田寅彦の科学論文集 (408、英文、全6巻) があります。この中には、今日の物理学で大きな発展を見た先駆的研究が多く含まれていることはよく知られています。流体力学に関連する論文もあります。日野幹雄の名著「流体力学」改訂版 (423. 8) には、流体力学を築いた巨人達のエピソードが挿入され、教科書をおもしろくしていますが、日本人では一人寺田寅彦が選ばれ、エピソードとこの中の論文が紹介されています。

2. 朝永振一郎著、「物理学とはなんだろうか」岩波新書 (420. 4)

「流体力学」の関連分野として、「工業熱力学」の講義を初めて担当した頃に、この本は出版されました。講義で使う教科書を読むと、式を追う限りにおいて内容は分かるのですが、何だか分かった気がしないのです。そんな中でこの本を読みました。この本の上巻には、ケプラーから話が始まって産業革命期における熱学の完成までの経緯が、まるでその場に居合わせたように、無駄のない流れるような文章で書かれています。

工業熱力学の講義に関連する文章は、新書版でわずか80頁程度です。しかもその中には物理学生への注があり、教科書の数式との関連が分かるようになっています。これなら分かる、そんな気がしました。なぜ、こんなに読み易く分かり易いか、さすが、ノーベル賞物理学者が最晩年に心血を注ぎ、若い人たちのために残した名著です。この本の魅力の一つは、教科書では説明が不足する学問の発達・完成の経緯が書かれていることかと思えます。それが読者の好奇心をくすぐり、疑問を上手に引き出し、それに次々に答ええてくれるからです。

名著、日野幹雄「流体力学」(423.8)には、流体力学の発達の経緯が随所に書込まれており、教科書として出色です。流体力学発達の歴史をテーマとした教科書としてH.ラウスの「水理学史」(517.1)があります。この中に、流体力学で重要な「連続の関係」を、初めて明示したのは、レオナルド・ダ・ビンチであるとあります。なんと、そのレオナルドの素描集のレプリカを本図書館は所蔵しています。

3 レオナルド・ダ・ビンチ素描集、Leonardo Codice Atlantico、(723.37)

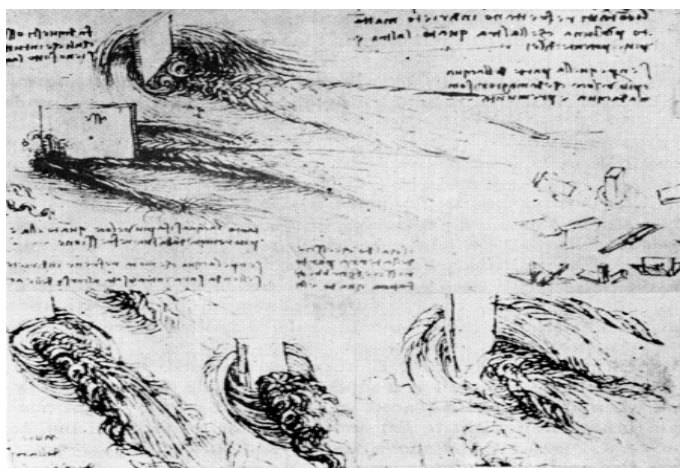


図3 レオナルド・ダ・ビンチのスケッチ
「物体をすぎる水の流れ」

レオナルドは、15世紀に活躍した天才画家であつたばかりでなく、機械工学、土木工学、造兵学等のあらゆる分野に精通した、ルネサンス期の天才エンジニアです。赤瀬川源平の「名画読本」によれば、ルネサンス期は、絵画史の暗黒時代だということです。ブリュゲルの絵(708.sek.15)のような、つまり世界を等価に見ていた面白さが失われ、人間の頭で考える思想とか観念が前面に出てきて、絵がつまらなくなつたと言います。しかし、レオナルドは別格で、なんと言つても観察の大将であつて、主題的な絵は描くけれども、その背後には無数の観察がひしめいていると赤瀬川は解説しています。ニュートン力学の誕生と言われる「プリンシピア」(108.38.6)の出版が17世紀末であることを

考えると、連続の式につながるレオナルドの観察が、いかに流れの本質をつき、先駆的であつたかが分かります。

図3は、レオナルドの膨大なスケッチ図の中の一枚を示します。流体力学史に残る巨人の一人G. I. Taylorは、「The Interaction between Experiment and Theory in Fluid Mechanics」と題するReview(1974)(423.8 Ann.)に、このスケッチを引用しています。流れの中に物体を置いた時の水面の様子を描いたものです。図中の文字は、右から左に向かって書かれた有名な左右反転の鏡文字です。Taylorの説明によれば、レオナルドは、この鏡文字で、物体背後には渦巻きが形成され、水面の形状は、人の髪と類似して、「素直に下がる髪」と「カールをかけた髪」に相当する二つの形に区分できる。そして、流れもこれに似て、「定常な流れ」と「渦巻く、乱れた流れ」に区別されると書いているそうです。この流れのスケッチは、500年以上も昔に描かれたものですが、流体運動の本質を良くとらえ、今日、流れを乱流と層流に区別し、流れの速度場をヘルムホルツ分解によって記述する現代の流体力学につながるものです。この図を含む1000枚を越えるレオナルドのスケッチのレプリカが3階の早野文庫に配架されています。この素描集は、新聞紙大の超大型の全12巻から成る総革表紙の大冊です。この大冊には索引も目次もなく、しかも各巻はずっしり重いので、これを閲覧するには相当の体力を要します。しかし、本物に近い画集を見る楽しみがあります。

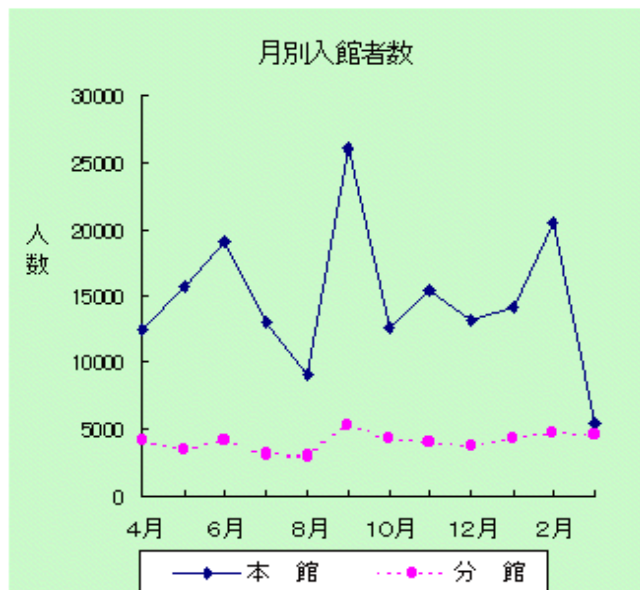
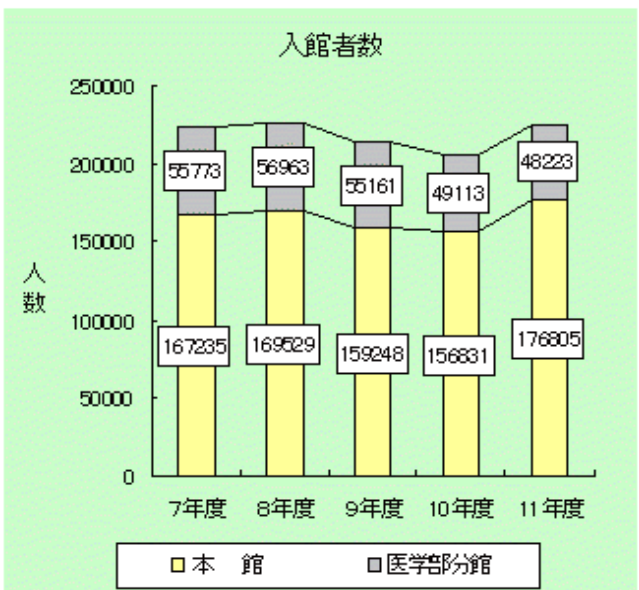
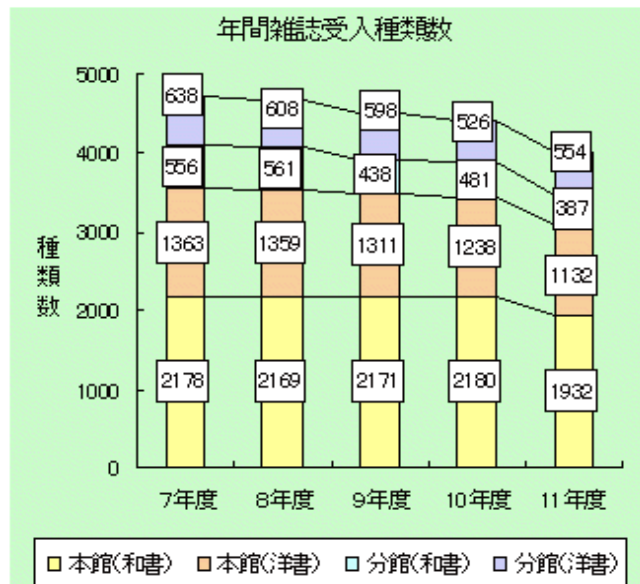
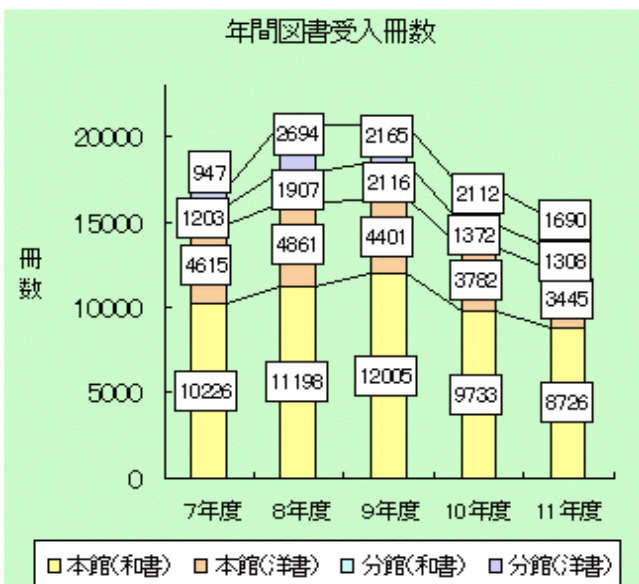
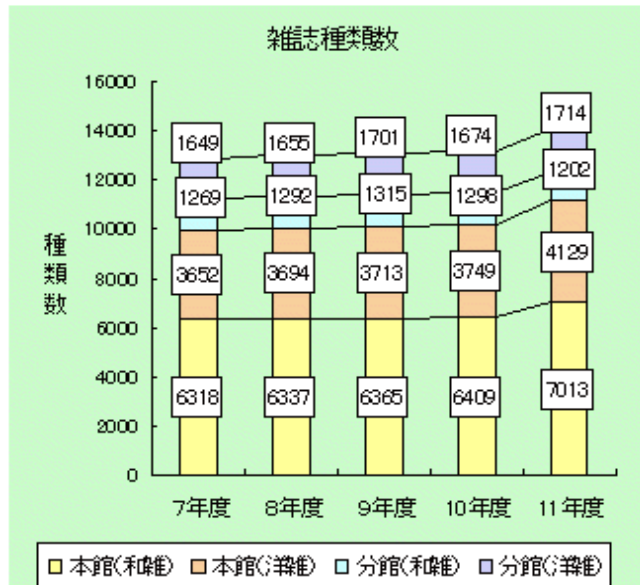
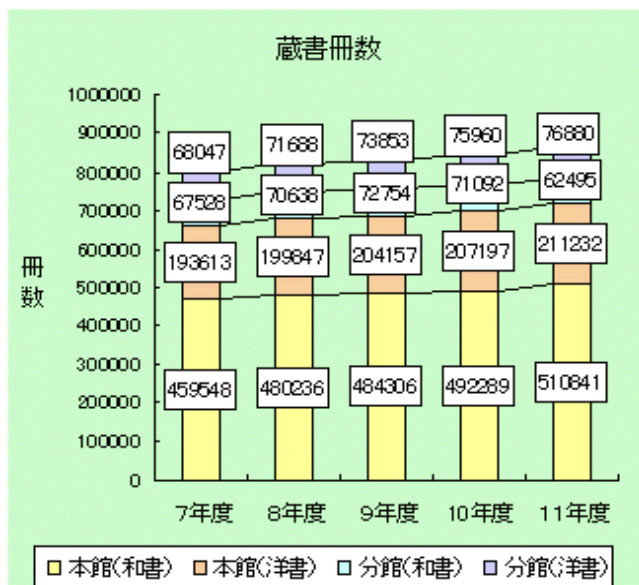
本学の図書館は、約86万冊の本や資料を所蔵しています。それぞれの本は、創設以来の岐阜大学人によって良書として選定されたもので、書庫は正に宝の蔵です。当然のことですが、本は見たり読んだりしなければただの紙束です。読み手の問題意識と本の内容が適合し共鳴した時、本は宝として輝きます。宝が本や資料の場合は、宝探しは「出会い」です。書庫では、大きな本が目立ちますが、書庫には、様々な分野について多くの良質の啓蒙書(小さな本)があります。専門家向けに書かれた大きな本の中に、ひっそりと配架されている小さな名著を見つけるのも楽しいものです。機会を見つけて、図書館書庫を徘徊して見てはいかがでしょうか。

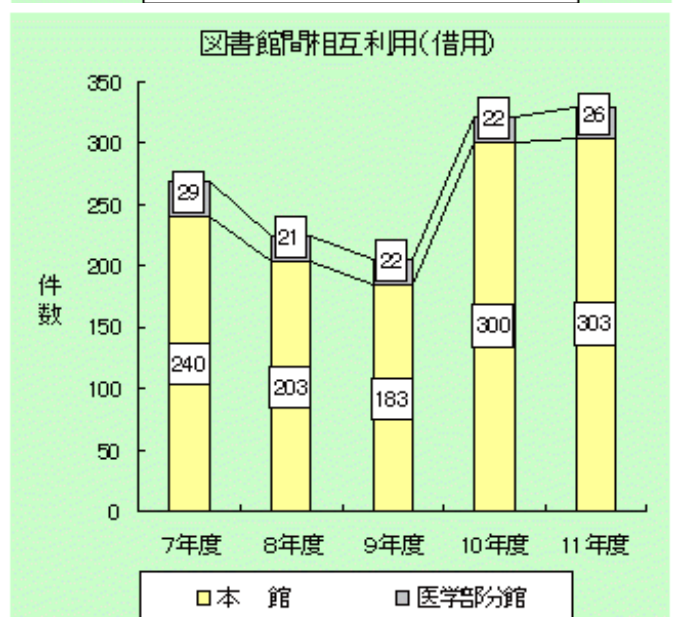
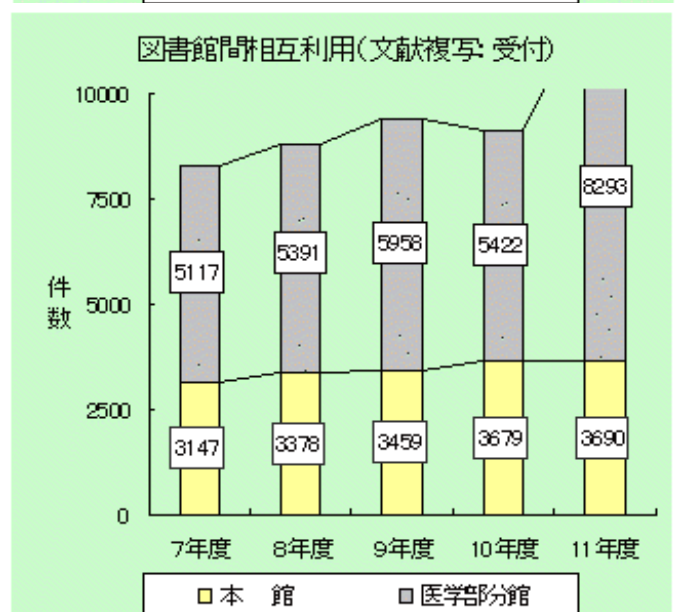
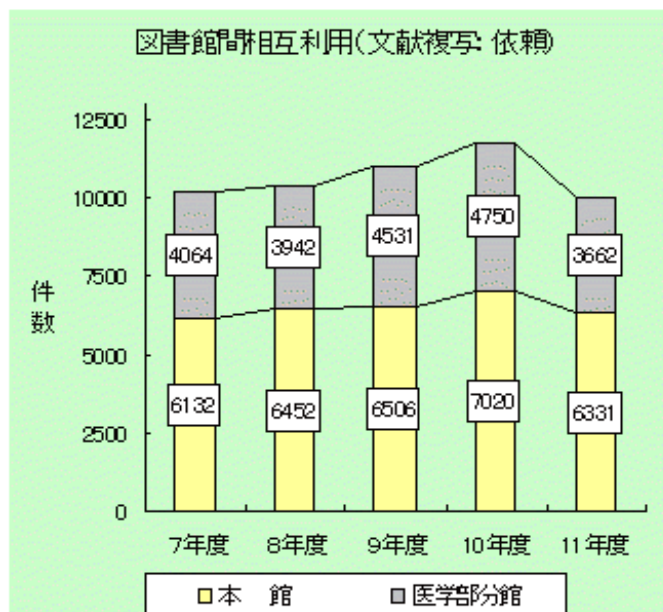
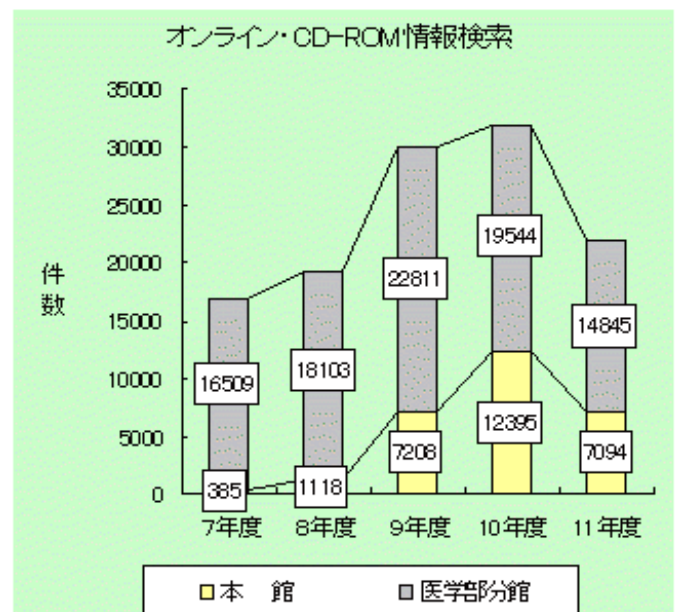
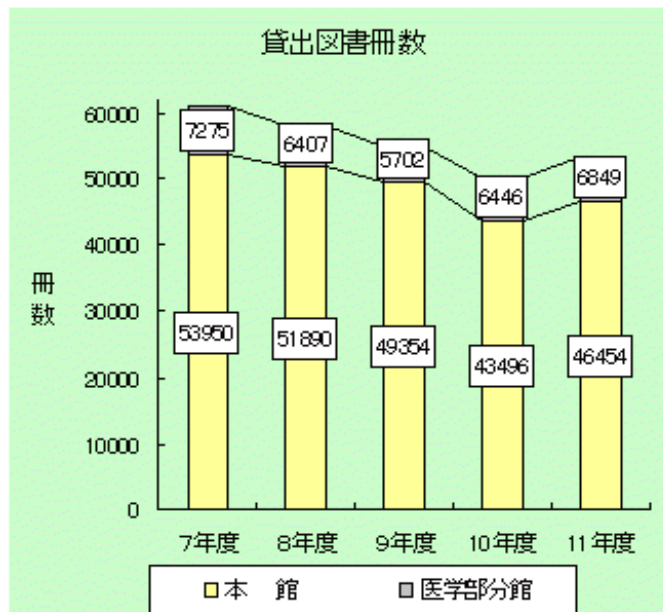
この小文で引用した本は、すべて本館に所蔵されています。書名の後の()内の英数字は、本学の図書館の分類記号を示し、記載のない本は寄贈図書です。

(ながた ひろし : 工学部教授)

グラフで見る附属図書館統計

平成11年度末現在で過去5年間の資料の所蔵状況及び利用動向の各種統計をグラフで表しました。





図書館利用者の1人として

林 香 月

図書館は、現在、さまざまな意味で、情報の宝庫となっている。本を中心に、ビデオやコンピュータ等により、更に多くの情報が得られるようになった。

私は、この岐阜大学に入学して、今年でもう6年目になる。私の大学生活において、図書館はなくてはならない存在でありつづけている。大学に入学し、自分の自由になる時間が増えた。アルバイトや部活動等により自分の世界を広げる時間に加え、自分の好きな分野の勉強に打ち込める時間も得られた。その勉強ができる学部・学科を選択し、入学したわけであるから、講義を受けるだけでもそれなりに満足感が得られるであろうが、更に詳しく知りたいと思うことも多い。そのようなときに、先生方と同様に頼りになるのは、やはり、図書館である。

私にとって、図書館とは、疑問解決の場であり、また、知識や興味を広げる絶好の場でもある。前者に関しては、疑問を解決すべく図書館へ向かうと、コンピュータによる検索のおかげで、簡単に、かつ、すばやく求める本に出会い、非常に助かっている。また、図書館のホームページにアクセスすれば、自宅からでも検索が可能である点もありがたい。後者に関しては、前者の理由で図書館へ行ったときの偶然の発見である。自分の求める本を探して

いる途中で、偶然、興味深い本が目に入ってくることもしばしばである。その思いもよらない出会いがあったときには、小さな喜びを感じる。そして、その本を求めて、また図書館へと足を運ぶことになるのである。私が図書館にこれから期待することには2点ある。1点目として、開館時間の延長である。現在、10時まで開館されているのは、月曜日と火曜日の週2日のみである。大学院生となった今ではさほど不便は感じないが、講義の多かった学部生時代には不便を感じることもあった。2点目として、蔵書の種類と数の更なる充実である。以上2点をぜひお願いしたい。

最後に、最近残念なことに、図書館において、信じられないような事件が発生しているようである。図書館とは、大学において必要不可欠な存在である。それにもかかわらず、そこが安心して利用できない場となりかけていることは、非常に嘆かわしいことである。私たち学生は、図書館のもつ意味を今一度改めて見直し、適切な利用を心がけていく必要があるのではないだろうか。一岐大生、一利用者として、提言する。

(はやし かづき : 教育学研究科大学院生)

私の目から見た図書館

郭 艶

私は中国の西安からきた留学生です。一年半前に、岐阜大学に入学しました。その時、一番見たかった場所は岐阜大学の図書館でした。なぜなら、図書館は留学生にとって、ただの勉強する場所ではなく、自分の国の情報を手に入ったり、小説を読んで、心の寂しさを癒やしたりするところでもあるからです。

私は岐阜大学に入学してからすぐに図書館を訪れてみました。図書館のなかには、さまざまな分野の図書が綺麗に並べられていて、利用者は簡単に本を探しだすことができると思います。また、開架式なので、自分が借りたい本の内容を確認する事が出来るので、なかなか便利です。とても、広く、綺麗な図書館だと思います。

その後、私は何回も図書館を利用しました。分からないことがある時は、カウンターに聞いてみると、どの先生も親切に教えてくれていました。また、図書館の本だけではなく、古い新聞もきちんと揃えてあり、私の勉強および情報収集にすごく役に立つと感じました。

しかし、いくつかの不便な点もあると思います。

例えば、このあいだ、レポートを書くためにある本を借りたかったのですが、その本は図書館の中にはなく、ある先生のところにあるとのことでした。それがまったく知らない先生だったので、借りに行くことはとてもできませんでした。仕方が無いので、岐阜県立図書館へ借りにいきました。また、わたしは岐阜大学に入る前に、わたしが北陸大学の留学生別科に一年間にいたのですが、その大学の図書館に外国の新聞や雑誌などがたくさんおいてありました。それと比べて見ると、岐阜大学の図書館はそれらの数が極めてすくないです。それを少し増やしたら、留学生の生活がもっと豊かになると思います。そして、外国語を習う日本人の学生のためにもなると思います。

図書館は私たちにとって、知識の宝庫です。その中の本はある時に無言の先生のものであって、ある時、友達のもでもあります。テストのまえに、利用する人が大勢見られますが、それだけではなく、いつも利用されたらいいと思います。

(かく えん : 地域科学部2年)

職員の異動 平成12年7月～12月

異動月日	内容	氏名	現所属等	前所属等
8月31日	退職	内田 順子		情報サービス課図書係
10月31日	退任	宇野 尚雄		附属図書館長 (工学部教授)
11月 1日	新任	松田 之利	附属図書館長 (地域科学部教授)	

お知らせ

・附属図書館電子図書館化推進委員会の発足について

第119回附属図書館委員会（平成12年8月28日）において、附属図書館館報編集委員会が改組され、附属図書館電子図書館化推進委員会が発足しました。新委員会では、館報編集が引き継がれ、広く電子図書館化について審議されることとなります。

・共通閲覧証の廃止について

国立大学図書館協議会第47回総会（平成12年6月28日）において、大学院生・教官の相互利用に際しては、従来の共通閲覧証の提示から学生証・身分証明書の提示へと変更されました。

共通閲覧証発行の対象となっていなかった学部学生については従来通りで紹介状が必要です。

岐阜大学附属図書館報「寸胴」第32号 2001年1月10日

委員長： 松田 之利

委員： 伊藤徳一郎 橋本永貢子 松岡敏男 中村隆 今井健 山崎捨夫
青山弘 細戸康治 弘瀬高久 村上喜廣 羽賀啓子

発行： 岐阜大学附属図書館
〒501-1193 岐阜市柳戸1番1 TEL058-293-2184